

原田脩記念ギャラリー稲童館主 植田 義浩

増田、増田、増田-----

私の知り合いに美の女神に愛されている3人の「増田さん」が居ます。この3人は今まで一度も一緒に会ったことはありませんでした。

まず最初に登場していただく増田常德さんは熱烈なファンを持つ東京在住の絵描きさんです。人間社会の不条理を掘り下げ、また人間の持つ深淵さなどの問題に真正面から取り組んで、大作を練り上げています。増田常德さん（以下常德さん）と知り合ったのは、10年以上前に開催された、宮崎県高鍋町の美術館における彼の個展がきっかけです。個展に誘ってくれたのは朝日新聞社の先輩で、常德さんの作品を愛する人たちの集まり「西風の会」の会長をしていた内海さん。内海さんはギャラリー稲童の支援者でもあります。当時の高鍋美術館長の肝いりで開催されたその展覧会は大規模なもので、会場は町立美術館だけでなく、隣町にある孤児たちの父と言われた石井十次の石井記念友愛園に付設された教会堂の2か所を使って行われました。開拓原野の原っぱに立つ教会堂の雰囲気とその中に置かれた彼の作品の思想性の両方が相まって衝撃的な展覧会でした。展覧会で見た彼の描いた女性の裸体像はしっかりと構成されていて力強く、太古以来の歴史を築いたのは女性であることを感じさせました。それ以来、彼の後援会の「西風の会」会報を送って頂いたり、東京で開催された個展を訪れるといったお付き合いが続いています。



続いて登場する増田啓一郎さんは行橋市のお隣、人口3万の豊前市にあるマスダ画廊の経営者です。マスダ画廊は田舎町の小さな画廊ですが、浜田知明の彫刻が本棚の前に

ちょこんと置かれていたり、須田剋太や香月泰男の小品が何気なく飾られていて落ち着いた雰囲気醸し出しています



先代が創業したのが 1971 年ですからこの小さな町で 50 年にわたって画商としての信用を築き上げてきたことになります。有名作家の作品も取り扱っていますが、それよりはむしろ増田社長がほれ込んだ作家の作品や地元の作家の発掘に力を入れています。ここで 2018 年に開催された山本容子さんの版画展を見て、「新人の発掘と世界の絵画の紹介」というこの画廊のテーマに納得しました。この画廊では、原田脩と私の小倉高校美術部時代の恩師吉松先生の作品も取り扱っています。画廊の先代と吉松先生とは絵描き仲間で名刺や看板の字は吉松先生の揮毫したものです。

3 番目に登場する行橋在住の画家増田信敏君（以下信敏君）とは学校は違いますが高校の美術部時代からの付き合いです。信敏君はその時代から原田脩の絵を評価していて、文化祭の作品発表をわざわざ見に来ていました。若いころは東京に出て働きながら絵を勉強していましたが、お父上が急に亡くなったため行橋に戻り、画廊喫茶「マリー」のマスターをしながらひたすらに独学で絵を描き続けてきました。世俗を離れ絵に打ち込む信敏君の姿



は、在りし日の原田脩を髣髴させます。若いころはジャクソン・ポロックばりの抽象画でしたが、現在は主に15～16世紀のヨーロッパ絵画を集中的に勉強して独自の具象世界を作り上げています。その彼の作品が、朝日新聞出版から発行された山形孝夫の本や、中央公論社から発行された夏樹静子の本の表紙絵にも採用されるなど、これまでの努力が認められてきました。

この3人が同じ日にお互い初めて出会う「アーティスト増田デー」がこの春、4月13日に実現しました。

きっかけは1本の電話からでした。3月のある日、増田常德さんから「一度稲童ギャラリーに行ってみたい」と思いがけない電話をいただきました。常德さんは五島列島の福江市富江町出身で、たまたま里帰りのついでに隣町の田川市立美術館で個展開催の打ち合わせがあるので、稲童ギャラリーまで足を運びたいとのことでした。もちろん、お出でいただくのは大変嬉しいことですから、喜んでお迎えしますとお答えしました。

この電話をいただいた翌週、マスダ画廊の増田社長と別件でお会いする用事があり、その折に世間話的に常德さんの来訪の件を話したら、思いがけない言葉が返ってきました。マスダ画廊では20年ほど前に常德さんの作品を扱ったことがあるとのこと。その時の図録を奥から取り出して「これはギャラリーに差し上げましょう」と言って私にくれました。さらに、常德さんにお会いしてみたいとのことでしたので4月13日の来訪時間を伝えて、ギャラリー稲童まで来ていただくことにしました。

当日、常德さんはワゴン車でやってきました。はるばる東京からワゴン車を運転して五島・福江市経由でやってきたのです。山の麓の手作りのギャラリー稲童を気に入ってくださって、本日はここに泊まることになりました。やがて増田啓一郎さんがやってきて初対面の挨拶もそこそこに、常德さんが持ってきて下さった最新の作品図録と、画廊主の増田さんが大事に保管してきた20年前の図録を比較しながら2人の会話は大いに弾みました。

お昼になったので、画廊喫茶「マリー」で増田信敏君お得意の焼きカレーを食べることにしました。ドアを開けて常德さんを信敏君と奥さんに紹介しました。そのとたん、奥さんが大きな声で「ほんとに増田常德さんですか！あなたが常德さんですか！私たち夫婦はずっとはあなたのファンでした」と大喜び。信敏君は常德さんの作品構成の堅牢さ、絵画空間の作りかたに共感していて、ずっと注目してきたそうです。信敏君の見せ

てくれた古い美術家年鑑には増田常德と増田信敏の名前が並んで掲載されていました。それにしても、夫婦そろって常德ファンとは意外でした。喫茶マリーを出て次に向かったのが行橋市「増田美術館」です。ここは地元の実業家、故増田博さんが4年前に収集した作品ごと市に寄贈した美術館で、橋本雅邦や上村松園の名作が鑑賞できます。ここでもやはり「増田」さんのお名前が登場し、常德さんもビックリでした。

その夜はギャラリー稲童で常德さんと信敏君と私たち夫婦の呑み会が始まりました。肴は画廊喫茶のお隣の居酒屋「ばば通」（ここは名居酒屋です）の女将お手製の魚料理。もちろん信敏君が女将に頼んで用意してくれたものです。酒は新潟の友人が送ってくれた銘酒「鶴の友」。酒も肴も良かったけれど、何より絵画談義に花が咲きました。田川市立美術館で開催予定の常德さんの作品展の件が酒の肴になりました。その美術展に併せて、稲童ギャラリーで小品展を開催する案も飛び出して盛り上がりました。ここに原田脩がいたらおそらくうれし泣きが始まったでしょう。常德さんの来訪は、絵の神様が与えてくれたギャラリー稲童開設10周年の思いがけないプレゼントでした。



常德さんから五島のお土産にセッコク（長生蘭）の株を頂戴しました。日当たりの良い森の中に自生する蘭です。根をミズゴケで覆い、風通しの良い林に中の山桜の幹に巻き付けて、かわいい花を楽しみました。ギャラリーの庭には内海さんに頂戴したオオタニワタリの株が元気に葉を茂らせており、五島列島からやってきたこの2種類の植物の美しい姿を見ることができます。

ギャラリーのあるこの地、行橋市稲童には五島列島から入植して果樹栽培を始めた人たちが建立したカトリック教会があります。五島との関係を改めて感じています。

常德さんの田川市美術館における展覧会は3年後の開催が決まりました。その時にはギャラリー稲童で小品展を開催いたします。お楽しみにお待ちください。

